

実相十全の恵みを見よ

「実相」において本当に与えられている神の恵み——「実相」において本当はすでに受けているわがあらゆる善き物——を認めえないで、現象界にあらわれた個々の出来事に感謝しているのは、蟻を探し出して、象を見のがしているのと同じであります。それは神様から見れば見当違いの感謝であります。神様は「お前にはもつとよいものが与えてあるのに、それには感謝しないで、人間はつまらないことに感謝するものだ」とおっしゃいます。また実際それほどありがたいと感じないのに、神様を讃美や感謝の言葉でおだて上げれば、いつそよき恵みを与え給うであらうと思つて、讃美歌を歌つたり、感謝の祈りを捧げている人もあるようですが、何もかも知つていられる神様の目から見たら、人間の心情が見え透いて、「偽善もいい加減にせよ」とおっしゃるであります。そうしますと、われわれは真に神から飲ばれる感謝を捧げるには、どうしても神がすでにわれわれに与え給っている十全の実相を明らかに見て、それに対してありがたさを感じなければならぬのであります。そうでない感謝は見当違いの感謝になるか、偽善者の感謝になるのであります。

すでに与えられている「実相」十全の善さを知ることができない場合に、われらはただ「神想観」をつとめ修して、実相十全の善さを観するようにつとめることが必要なのであります。

罪を消す道

神に祈るのは、自分の犯した罪を不当に赦してもらおうなどという甘い考えでやるのは卑怯なことです。神様を対立的において口先で神様にあやまったからとて、諛こびたからとて罪というものには消えるものではないのです。罪が消えるのは、ただわれわれが、絶対無罪の「わが実相」に溶け込んだ時のみであります。暗黒は口先で謝罪あやまったからとて消えるものではないでしょう。暗黒かかげが消えるのはただ光に照し出されることによってのみであります。それと同じように、われわれの「罪」というものが消えるのは、絶対無罪

の「わが実相」の真ん中に溶け込むことによつてのみです。「わが実相」そのものが本来「光」でなくて「暗黒」であつたならば、「暗黒」をいくら削つてみてもみがいてみても「光」は生まれて来ないはずであります。もしわが実相が本来「暗黒」であつて、他から神の光を射し込まして光明になるものならば、それは、自分自身が救われる——すなわち自分自身が光明になることではなく、暗黒自身が滅ぼされることになるのです。自分が滅ぼされるところに、救いなどはあるはずがないのであります。だから、どうしても自分自身の救いが成就するには、本来自分自身が、「神の子」であることが条件なのです。自分自身の本来相が「神の子」であり、自分自身の本来相が「光明遍照」であり、自分自身の本来相が「知恵円満」であり、自分自身の本来相が「生命無量」であることによつてのみ、その本来相に帰入きにゅうする——すなわちわが実相に帰入することによつて救われるのであります。

聖典『久遠の實在』に収録された「智慧の言葉」に、「生命の真相——生長の家の礼拝の対象はこれである。生命の真相——あらわれて阿弥陀仏となり、釈迦となり、イエスとなり一切の善き宗教の教えとなる。『彼を信する者の、その名によりて罪の赦しをうべきことを証す』と『使徒行伝』十章四十三節にあるが、彼とは生命の真相である。生命の真相を信じ礼し、これに結びつく者は幸いなるかな」というのがあります。「生命の真相」を信じてこれに結びついた時のみ、一切の罪（包み）（仮相）は消え、そこに救いが成就するのであります。神という対立者を想像してそれにひれ伏して拝み倒したからとて、罪は消えるものではありません。

聖經『甘露の法雨』のなかに「罪と病と死とは、神の所造に非ざるが故に、實在の假面を被りたれども非實在なり、虚妄なり。我れは此の假面を剥いで罪と病と死との非實在を明かにせんが爲に來れるなり……罪は非實在にして迷ひの影なるが故に、十方の諸佛も衆生を攝取してよく罪を消滅したまへり。イエスキリストもたゞ言葉にて『汝の罪赦されたり』と云ひてよく罪を消滅したまへり。われも言葉にて『生長の家』の歌を書かしめ、言葉の力にて罪の本質を暴露して、罪をして本來の無に歸せしむ。わが言葉を讀むものは實在の實相を知るが故に一切の罪消滅す。わが言葉を讀むものは生命の實相を知るが故に一切の病消滅し、死を越えて永遠に生きん」とあります。これは「生長の家大天使」の啓示でありまして理屈ではないのであります。「罪」は「罪」をとらえて一つずつ支払っていても無くなるものではありません。それは例えば、あなたが暗黒の申において、暗黒を捨て

ようと思つて暗黒を握つてなげ棄てなげ棄てしても、暗黒は無くならないのと同じであります。暗黒はすなわち「光が無いこと」——本来「無」でありますから、暗黒を握つて捨て去るわけにはゆかない。罪も本来「無」でありますから、「罪」をとらえて一つずつ支払つても消えるものではない。暗黒を消すにはただ光を点ずればよい。罪を消すにはただ「生命の真相」に歸入するだけでよいのであります。

わが「生命の真相」は神の子であり、その本源は神の無量無限の愛と生命と知恵と光明とにつながっているのでありますから、これを悟りこれに歸入しさえすれば、すべての罪の状態、不完全の状態は消えてしまふのであります。「罪を赦す」というのは「お前は、罪がなお存在しているけれども勘弁してやる」というような意味ではないのであります。宗教上の「罪の赦し」ということと、ふつうに勘弁してやるということとは別なものであります。宗教上の「罪の赦し」ということは「罪を消し罪を無くしてください」とことなのであります。罪そのまま勘弁してください——罪そのまま優遇してください——罪そのまま快樂を与えてください——などという言葉は、対人関係の上では使える言葉でありますけれども、宗教上の「罪の赦し」ということは別物であります。これを混同するから、罪のままで「天国」とか「浄土」とかいう、ある「歡樂境」へ救いとってももうような虫のいい誤解を生じ、迷信を生ずるのでありますけれども、宗教上の「罪の赦し」ということは、「罪」そのものが消し去られる——「罪」そのものが本来の「無」に歸することなのであります。「罪」のまままで天国とか浄土とかいう歡樂境に引き上げられるというよう

な「迷信」は、それ自身で矛盾であります。古聖は「罪の価は死なり」と申しましたが、罪とは実相を包み隠していることであり、実相の中にのみ本当の喜び楽しみはあるのですから、罪の存する限り「実相無限の喜び」は包みおおわれているはずであります。

「罪の価は死なり」とか、「罪の報いは苦しみである」とか申しますが、いっそう適切に言えば、「死」とか、「苦」しみとかは、罪の償いとか、罪の報いとかいうような間接的なものではなく、「罪」そのものが「生命の死」であり、「罪」そのものが「常楽の死」であります。なぜなら、「生命」の本然の相を包み隠しているのが罪であり、神の子たる「実相の常楽」を包み隠しているのが罪でありますから。だからわれわれは罪そのままで勘弁してもらっても、決して「実相の常楽」を味わうことはできないのであります。だからわれわれの罪が赦されて天国的境地に引き上げられるためには、ぜひとも「罪」そのものの破壊がなければならぬのです。それ故にわれわれが宗教上の意味で「罪が赦される」というのは、罪そのものが破壊される―罪そのものが本来の「無」に帰して、神の子本来の実相の常楽があらわれるということになればならないのです。

人間は「神の子」であり、常楽がわが実相であります。「神の子」たる実相があらわれなくて、魂の常住の歓楽ということはありません。だから「罪」を犯して欲びを得てやろうと思っても、結局はその人は苦しみをなめるのみなのです。罪人はとらえられないで逃げている間中かえって苦しく、囚人は最後の判決の下るまでの間中かえって苦しいのであります。

罪の実相が苦しきであり不幸であるのは、常楽の「神の

子の実相」が隠れているからです。神は愛であるから、われわれが神に祈っても、神は罪のままで勘弁するということはないのです。不幸のままで我慢するということはないのです。どうぞわたしを罪のままで赦してください。罪のままで幸福を与えてくださいと祈るのは、「どうぞ、目を閉じたままで光を見せてください。どうぞ狭い孔に押し込まれたままで広い世界を味わってください」と祈るのと同じことです。神は「光を見たければ目を開きなさい。広い世界へ出たければ狭い孔から逃れ出なさい」とおっしゃるほかはないでしょう。それと同じように、罪のまま幸福を得たいというものには、神は「なんじが常楽の幸福を得たければ、本来『罪』なきなんじの実相を見よ」とおっしゃるであります。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社